

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：34414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380911

研究課題名(和文) 成人期女性の生きがい感形成プロセスの実証研究：ライフコースの現状と希望の観点から

研究課題名(英文) An experimental study on the psychological processes of engendering a feeling of ikigai in adult women from real and ideal life courses perspective.

研究代表者

熊野 道子 (Kumano, Michiko)

大阪大谷大学・教育学部・教授

研究者番号：20413437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデルを成人期女性に適用して、成人期女性が生きがい感を形成する心理プロセスをライフコースの観点から明らかにすることである。生きがいに関する基礎的研究として、ikigaiの英語論文に関するレビュー、生きがい感と幸せ感の相違についての研究を行った。そして、成人期女性のライフコースの一つとして重要な子どもの誕生について、子ども誕生後の生きがい感の変化を生きがい感形成プロセスの観点から検討した。さらに、成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感の関係を検討した。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to clarify the psychological processes of developing the feeling of ikigai in adult women from different life course perspectives, by applying the previously developed model, that is, the model of the processes of engendering a feeling of ikigai from a two-dimensional perspective of time and situations, to adult women. In addition, papers written in English including the term ikigai were reviewed, and differences between feeling ikigai and feeling shiawase were examined. Childbirth is an important life event during the life course of most adult women. Changes in the feeling of ikigai in adult women after childbirth were explored by referring to the psychological processes of engendering the feeling of ikigai. The relationship between the feeling of ikigai, and the real and ideal life course was examined.

研究分野：教育心理学

キーワード：生きがい感 ライフコース

1. 研究開始当初の背景

生きがい感を形成する心理プロセスに焦点を当てた研究の成果として、時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル(熊野, 2012)(Figure 1, 以下, 生きがい形成モデルという)が作成されている。

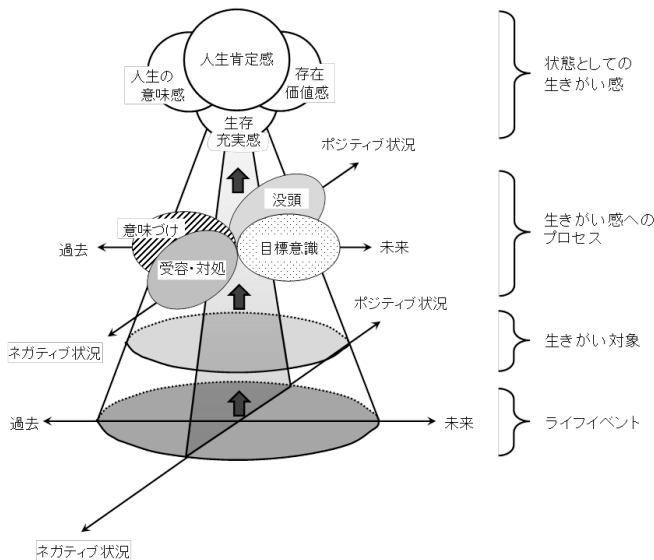


Figure1 時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル (熊野, 2013より転載)

このモデルの基本構造は、生きがい形成で重要と考えられる時間(過去・現在・未来)と状況(ポジティブ状況・ネガティブ状況)の2次元を設定し、さまざまなライフイベント(人生の出来事)から、生きがい対象(生きがいをもたらす対象)となるものが選別され、生きがいプロセス(生きがいを感じている精神状態になるためのプロセス)を経て、生きがい状態(生きがいを感じている精神状態)を形成する心理プロセスを示している。生きがいプロセスには時間と状況の2次元が導入され、過去には意味づけ、未来には目標意識、ポジティブ状況には没頭、ネガティブ状況には受容・対処が配置されている。生きがい状態は、人生肯定感が核として頂点に配置され、次に中心的な要素である存在価値感、人生の意味感、生存充実感が人生肯定感の周囲に配置されている。

さらに、このモデルに沿って、生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度が作成され、その信頼性と妥当性が確認されている(熊野, 2013)。

そこで、本研究では、生きがい形成モデルを成人期女性に適用して、成人期女性の生きがい感をライフコースの観点から明らかにすることであった。

2. 研究の目的

(1)研究1: 生きがい感に関する基礎的研究
まずは、生きがいという概念が、日本からどのように海外に発信されているか、また海外でどのように論じられているかを明らかにすることを目的とした。次に、生きがい概念に注目し、一般的な日本人にとっての生きがい感と幸せ感の相違を明らかにして、エウダイモニア的幸福感と快楽的幸福感との関係を明らかにすることであった。

(2)研究2: 成人期女性のライフコースと生きがい感に関する研究

成人期女性のライフコースの一つとして重要な子ども誕生と生きがい感との関係を検討した。乳幼児の父母を対象として、子ども誕生後の生きがい感の変化と、その要因を生きがい感に対する考え方と生きがいに至るプロセスの観点から明らかにすることであった。さらに、成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感の関係を検討した。

3. 研究の方法

(1)研究1: 生きがい感に関する基礎的研究
まずは、ikigai と表記された心理学、教育学、医学系の30英語論文について、国内外からの発信状況、研究動向、ikigai の定義を明らかにすることを目的とした文献研究を行った。

次に、日本人の30代男女846名(男性418名、女性428名)に対してウェブ調査を実施した。調査項目は、幸せ度・生きがい度、幸せと生きがいの違いの有無、幸せと生きがいの違いの内容記述であった。分析には、自由記述の分析にはKJ法(Kawakita, 1986)を用い、統計検定にはIBM SPSS Statistics(ver. 22.0)を用いた。

(2)研究2: 成人期女性のライフコースと生きがい感に関する研究

就学前の子どもがいる親859名(父親422名、母親437名)に対してウェブ調査を行った。父親は有職者に限定し、母親が無職である場合を専業主婦家庭とし、母親が有職である場合を共働き家庭とした。共働き父親224名、専業・父親198名、共働き母親228名、専業・母親209名であった。

調査項目は、生きがい感(現在・子どもの誕生前)、生きがいプロセス尺度、生きがい状態尺度、10点満点の生きがい感の自由記述であった。

数値データ(生きがい感、生きがいプロセス、生きがい状態)の分析については、IBM SPSS Statistics ver. 22.0、IBM SPSS Amos

ver. 19.0を使用した。記述データ(「10点満点の生きがい感」の記述内容)の分析については、KH-Coder ver.2. Beta.31(樋口, 2014)を用いて分析を行った。

さらに、成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感に関する web 調査を行った。

なお、研究1、研究2ともに、調査は無記名式で行い、調査目的を最初に説明した。そして、調査が強制でなく、自由に拒否でき、得られたデータは統計的に処理されることや研究以外に使用しないことを説明した。また、調査会社に調査対象者の個人情報保護されることを確認した。

4. 研究成果

(1) 研究1：生きがい感に関する基礎的研究

ikigai と表記された英語論文の文献研究

ikigai と表記された心理学、教育学、医学系の30英語論文のうち、海外からの発信は6論文であり、日本からの発信は24論文であった。この30論文を研究領域別に分類すると、医学系の疫学調査が約半数と最も多く(14論文)、高齢者の調査研究が5論文、介護者の調査研究が2論文、生きがいについての論考が9論文であった。各研究領域の研究動向に相違がみられた。

ikigai の英語表現(ikigai を英語で言い換えた表現)は、worth living(生きる価値)を含むものが14論文、purpose in life(人生の目的)を含むものが7論文、psychological well-being(心理的 well-being)を含むものが2論文であり、英語表現を示していないものが7論文であった。研究領域別での ikigai の定義には相違が認められた。

生きがい感と幸せ感に関する基礎的研究

幸せ度は6.07(男性5.72, 女性6.42)であり、女性の方が男性より有意に高かった($t(844)=4.35, p<.001, d=0.30$)。生きがい度は5.75(男性5.59, 女性5.92)であり、男女での有意差はみられなかった(熊野, 2013)。

幸せ度と生きがい度で調査参加者を3群に分類した。3群は幸せ度と生きがい度に同じ数値を選択した場合(同水準群)、幸せ度が高く生きがい度が低い場合(幸せ高・生きがい低群)、幸せ度が低く生きがい度が高い場合(幸せ低・生きがい高群)であった。3群の人数分布については、同水準群が最も多く(453人)、幸せ高群270人、生きがい高群123人であった。

「幸せを感じることに生きがいを感じることの違いがあると思うか」を尋ね、あると回答した675人(79.8%)に対して、「幸せを感じることに生きがいを感じることの違

いは何か」を自由記述で回答を求めた。

その反応をKJ法により分析した結果、幸せを感じることは、生きがいを感じることに比較すると、うれしい、やすらぎといった感情面の要素が強く、現在志向であった。生きがいを感じることは、幸せを感じることに比較すると、没頭、好きなことをするという行動面の要素が強く、達成感・充実感という感情でより捉えられ、生きる意味・目的、存在意義といった価値意識を含み、目標追求など未来志向であった。

この結果を快樂的幸福感、エウダイモニア的幸福感の関係から考察すると、一般的な日本人が幸せを感じることは快樂的幸福感であり、生きがいを感じることはエウダイモニア的幸福感であることが検証された。エウダイモニア的幸福感を意味する生きがい注目して研究を進めることは、幸福感を解明していくことに重要であることが示唆された。

(2) 研究2：成人期女性のライフコースと生きがい感に関する研究

現在と子ども誕生前の生きがい感

現在の生きがい感は、性別と家族形態による有意差はみられず、7.46~7.69であった。

子ども誕生前の生きがい感は、専業・母親は共働き母親より有意に低かったが、現在の生きがい感は4群に統計的有意差がみられなかったため、専業・母親は子ども誕生後の生きがい感の上昇が最も大きく、共働き母親は子ども誕生後の生きがい感の上昇が最も小さいと考えられる。

子ども誕生後の生きがい感の変化

子ども誕生前から現在の生きがい感への変化をみるために、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する場合、変化のない場合、低下する場合に分けて、該当する人数を、性別と家族形態の4群について集計した。4群のいずれの群でも、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇した者の割合が最も大きく(48~62%)、次に変化のない者の割合が大きく(29~45%)、低下した者の割合は少なかった(7~14%)。

性別と家族形態の4群における子ども誕生前と現在での生きがい感の変化する者の割合について、²検定を行った結果、4群において子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する場合、変化のない場合、低下する場合の比率が統計的に有意に異なっていた($\chi^2(6)=21.3, p<.01$)。

残差分析を行った結果、共働き母親は、子ども誕生前より現在の生きがい感が低下する者の割合が4群の中で最も大きく(14%、調整済み残差=3.0, $p<.01$)、専業・母親は、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する者の割合が4群の中で最も大きかった(62%、調整済み残差=2.9, $p<.01$)。

10 点満点の生きがい感の記述内容

10 点満点の生きがい感の記述内容について語を抽出し、同様の意味をもつと考えられる語をまとめる coding を行った。そして、20 人以上に出現している coding について、ward 法による階層的クラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。

その結果、6 つのクラスターに分類され、各クラスターが解釈可能であった。4 群全体のクラスターの出現人数とその出現比率をみると、「CL6 自分の人生実現」が 53% と最も多く、次に「CL2 毎日充実」44%、そして、「CL5 社会生活」33%、「CL1 経済生活」32%、「CL4 健康生活」25%、「CL3 子ども成長」25%であった。

4 群のいずれの群でも、最も大きな割合を占めるのは「CL6 自分の人生実現」(46~60%)であり、次に「CL2 毎日充実」(41~50%)であった。

各クラスターについて、4 群別に²検定を行い、有意だったクラスターの残差分析を行った。その結果、専業・母親は他 3 群に比べると、「CL3 子ども成長」と「CL6 自分の人生実現」を 10 点満点の生きがい感とする者の割合が多く、父親は母親より「CL6 自分の人生実現」を 10 点満点の生きがい感とする者の割合が少なく、専業・父親は「CL4 健康生活」を 10 点満点の生きがい感とする者の割合が少なかった。

成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感の関係に関する検討

成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感に関するウェブ調査を実施した。そのデータを分析し、成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感の関係を検討した。

結論

専業・母親は子ども誕生後に生きがい感が高まる者の割合が最も大きく、共働き母親は子ども誕生後に生きがい感が低下する者の割合が最も大きかった。このことについて、10 点満点の生きがい感と生きがいプロセスの観点から考察したところ、以下のように考えられた。

専業・母親については、(a)専業・母親は 10 点満点の生きがい感として子ども成長の割合が大きいことと、(b)専業・母親の生きがい感上昇群は、子どもの成長過程の中で、過去の出来事を人生へ意味づける程度が高いことと関係していると考えられる。

共働き母親については、(c)共働き母親は、子育てと仕事に追われて、10 点満点の生きがい感で主要な要素である自分の人生実現や毎日充実が満たされにくいことと、(d)共働き母親の生きがい感低下群は、子育てと仕事の両立の困難なネガティブ状況を受容し対処する程度が低く、ポジティブな状況に没頭す

る程度が低いことと関係していると考えられる。

今後さらに、成人期女性のライフコースの現状と希望と生きがい感の関係を明らかにしていくことが本研究で可能となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

Kumano, M. On the concept of well-being in Japan: Feeling shiawase as hedonic well-being and feeling ikigai as eudaimonic well-being. *Applied Research in Quality of Life*. 査読有, 13(2), 419-433, 2018.

<http://dx.doi.org/10.1007/s11482-017-9532-9>

熊野道子 乳幼児の父親・母親における子ども誕生後の生きがい感の変化 - 生きがい感に対する考え方と生きがいプロセスからの検討 - 大阪大谷大学紀要, 査読無, 52, 121-135, 2018.

https://osaka-ohitani.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=226&item_no=1&page_id=13&block_id=23

熊野道子 乳幼児をもつ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感の関連 *Journal of Health Psychology Research*, 査読有, 29(2), 45-52, 2016.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhpr/29/2/29_150310060/_pdf/-char/ja

熊野道子 高齢者の生きがい - 時間と状況の 2 次元からみた生きがい形成の価値過程モデルからの考察 - 生きがい研究, 依頼有, 21, 4-19, 2015.

熊野道子 生きがい(ikigai)の定義と研究動向 - ikigai と表記した心理学・教育学・医学系の英語論文を対象として - 大阪大谷大学紀要, 査読無, 49, 77-94, 2015.

[学会発表](計 2 件)

熊野道子 乳幼児の父親・母親における子ども誕生後の生きがい感の変化 - 10 点満点の生きがい感と生きがいプロセ

スからの検討 - 日本心理学会第 81 回
大会発表論文集, 784, 久留米シティブ
ラザ(久留米大学), 2017 年 9 月 20 日.

シンポジウム「生きがい研究から見えて
くるもの(2) - 生きがい形成への支援
に向けて -」(企画者: 濱野佐代子・浦
田悠, 司会者: 浦田悠, 話題提供者: 濱
野佐代子・浦田悠・大山智子, 指定討論
者: 熊野道子) 日本教育心理学会第 56
回総会論文集, JA08. 神戸国際会議場
(神戸大学) 2014 年 11 月 7 日.

〔図書〕(計 0 件)
なし

〔その他〕(計 3 件)

・寄稿(計 3 件)

熊野道子 フロントライン: 乳幼児の親
の幸福感 - 育児感情による自分の役割
配分調整との関係 - Health
Psychologist (日本健康心理学会ニュー
ースレター), 依頼有, No.73, 6, 2017.

http://jahp.wdc-jp.com/health/pdf/1703_73.pdf

熊野道子 自著を語る 熊野道子著『生
きがい形成の心理学』教育研究, 依頼
有, 41, 97-98, 2015.

http://www.osaka-ohtani.ac.jp/common/img/department/welfare/download/041_p97.pdf

熊野道子 女性の「ライフコース」選択
をめぐって 学生相談室だより「光風」,
依頼有, 1, 2014.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊野 道子 (KUMANO MICHIKO)
大阪大谷大学・教育学部・教授
研究者番号: 20413437

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし